

4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4

1本
415
1

久保之取蛇尾

初篇上



加5
門號
卷

清水漁休取蛇尾序

臣藏書

圖書

やうのよがとうふふりき往
てのとれ。ぬまくらひとののれ
あき乃下さにあきへたかを
下りてせうのまくいとも
まことをうむる日をもる。半
少く降り約のあくろ平
らくすなれと柔と考る榮
つまうる。小鳥のあらわとく

あつせふのまゝ津の賓すと定
り書も一ぬ治をとくしむ
ものも

能は入に

アホム

久保之取蛇尾因縁

玄旨の語

そぞいの字

地六かと云便後取縫

綱のめ風手は因

走えう小付因

持の火ハ持の因接の訓

秀安鉄道

志父都

猿の訓

火とたま

アモ望

アモ

アモナシ

アモ

アモナシ

植ヌ衣ミクニヌヌ神

雨波をも使ひよ

ほくまきをよ

かのうの扇

たんさく

懸哉

雨乞のう

止雨す

佛は傳す

あちがみ海

寺のもす

喧嘩争ひの持ちもす

人をやめれ日

口付日

まなづく日

風の向く方

さべる日

耳付日

おづく日

がら日

さゝぐれきく日

木下付日

人れふくまくる日

木なぶ日

せきげふ日

疹の訓

巫の口よふ日

みがく日

すとく日

脚痛の訓

すとく日

けはみゆ

えうくまなづく日

店

之係之取蛇尾

御川あらわいもく。古くからあるが、今れせよ亦う
トカハ、吾のゆふる事なまく。唐の儒書乃射道をえま
たはしやまきとあわく。今古とよひに、ゆく執心えま
きやく。不意とぞもどりへ、ゐてゆきなれど。そのあ
もふくよでよき従がさんじよきものもく。はありて、古人
ヨドクキをもつて、あくとそくすゑもく事も。先古人
乃あくわくきて、まもくうくよ付て。出来まくまなく。た
まの恩徳よあすとよすか。とくとく事めびらん
芳一のくわくわく

○伊勢お経よ。むかし仁和のうぶ。芥けり。章一。ゆひく
時今、たゞの事あけども、むかし。むかし。むかし。事なき
い。おや、おのれのわたらへてまよひせば、おもひく。
かく、衣わ

卷之三

おされどひくまくをかく衣ころすとおまつてはり
乾盡童蒙抄第4云。オキナサヒトハ。オキナアソヒトモ。又オキ
ナサレ氏云ナリ。之に俊賴を名ね。清興義お等。おもむさ
きとよすなりといつ。僻案が云。老てされよやうと
なぐさく。顯恥云おされましと。おまされまし
取蛇尾とかとく。契沖云。翁とくい。おきなびよく。翁めく。
おめくと。翁い。わるのえく。翁。田をひとよくとく。生まの
役へかくのとく。今來よ。わざあまくとよあくすと。ゆゑ
もなくすますとくと。すとくと。翁せんすく。翁
とよく。又もまひのひれ觸る。この邊は通とく。ゆゑもす
をよか。慰じまと底をなすとよす。いよ。數ませう。又
翁もいふ。ああとひやう。あまくのあまく

昌憲按よ。古事記曰。速須佐之男命曰。于天照大御神我心清明故我所生之子得手弱女因此言者自。我勝云而於勝佐備此二字以音云延佳曰。佐備音勝之意云。此勝佐びといつゝとて。勝ほゞまなづ。さうふとて。有そびといつゝも。かくまくまなづ。し。持衣のともどよ。彦乎。と。繡くもなづ。くひきと。あざめと。人をもぐもを。かくひ。行幸のけ。供も。ばくと。ももくつ。ハナクと。いふるべく。時三行平六十九歳次年致仕表ヲ奉ト。未だ。まつまえ第ニよ。をと。おまこをと。まこと。おまこと。おまこと。おまこと。

字彙矜居御切音
京矜持自飾也驕
矜自負也亦誇持
風汎跨大言也

小貝コウガイともあれ、少、るびルビともあき、ゆくとあうやいなるも、とぞ、かんむり、
くは、はすよ、とくわざざ、とくとぞ、とぞ、今、くわづ、僻カタ業ノハラ乃
釋スルを、くもん、按スルよ、日本紀ニホンノシキ、仁德ニントクノテ云、爰アマ皇位空ムツコトノミコト、之既經ミコトノミコトノミコト三年、
時ヒメ有リ海人シマヒト、賚モテ鮮アサツキ魚ウニ、之苞ハグ苴ハグ、献ル于ウ菟道アマミヤ宮ノミコトノミコト也、太子ミコトノミコト令ミコトノミコト海シマ
人ヒト曰ハ、我アタマ非ス天皇アマミヤ、乃返レバ之令ム、進ラ難波ニオホ、大鷦鷯サザエ尊サザエ、返シ以シ
令レバ、獻ラ菟道アマミヤ於ウ是シマ海人シマヒト之苞ハグ苴ハグ、鰐アザラシ於ウ往キハシ還カム、更リ返リ之取テ他タチ
鮮アサツキ魚ウニ而シテ獻ル焉ハ、讓リ如シテ前アマミヤ日ヒ、鮮アサツキ魚ウニ、鰐アザラシ海シマ人シマヒト苦シ於ウ屢カタル還カム、乃
棄リ鮮アサツキ魚ウニ而シテ哭ナフ、故コトハナニ諺ハシマ曰ハ、有リ海人シマヒト耶ヤ、因オノカモノカラ己ミコト物モノ、泣シテ其ヒト是シマ之
縁モトナリ也ハ、古今コトハナニ多シ、是シマ流リ、據リてシテよめシタ、なづシタし、あよ
のかシタ、もシタ、むシタ、彼カタ潤シタ之シマ魚ウニをシタ、從文シタ魚ウニ、水蟲ミツツバカ也
とシタ、藻シダ、住虫リムシとシタ、おシタ、とシタ、小虫コムシとシタ、字彙シヨウ蟲ツバカ
裸毛羽鱗介之慈名シヨウ、名シタいアマミヤ、名シタいアマミヤ、名シタいアマミヤ、名シタいアマミヤ
とシタ、彼カタ流シタ、おシタ、とシタ、通證シタ云シタ今俗諺シタ、我物シタ故音シタ位シタ

く袖付着。祝の面おさげ。火桶の熾やかなど皆後事)

○便後は妹ハにうそとつも。西保ひらき。は。痛まよ
女をうそとつも。うそとつも。うそとつも。のち。もし。うそと
うそとつも。あそび。あそび。あそび。あそび。あそび。あそび。あそび。あそび。

うそとつも。うそとつも。

ちうひをおもひう人のまねをうそとつも。うそとつも。

○後はおもひうそとつも。人のまねをうそとつも。うそとつも。

まのせおもひうそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。
まのせおもひうそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。
まのせおもひうそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。

は。うそとつも。

○網のあは風とあはやいよも。古き遠なり。萬葉集よ。へよ

まぬとれくとて

めくらまこと風とれぐくあはれも。と。納められまくは。ひけ
又散本まよ

おもひうそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそと
○うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。
うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。
又大おもひうそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。
うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。
うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。うそとつも。

○徳よまうよ。うは。うそとつも。ほ。挽まよ

年のみだ。まんみだ。まんみだ。まんみだ。まんみだ。まんみだ。
痛ま。痛ま。痛ま。うそと。うそと。うそと。うそと。うそと。

○捨ひのうと。捨ひのうと。捨ひのうと。捨ひのうと。捨ひのうと。

自業自學果の、

おくれるのもうとくもれ、おのうよみでゆく

又新政より歎其固主十ニ力ナ

むくひれおのとをもあなれや我立ゆきよかをもふすなう
まよ、わざくせをもとよくようやく。後後の後く、や核のま
ヒト御きよま。契沖師云。捨とヒとつとそひの義すあはく。
捨と帝室のえ材をもとぞ、少のま、ほづと事せむ。かえ
の材をもとばはの刑うよりていとくづべし

○或へる前より謂て摩呂の事のみに志紀の後よりは
ヨリモトをもあらず。但一古注より小見ゆる所
シムカナアリと云ふ。其ある後のうちいつまつゝ是
シムカナアリ。又云ふ。予ハ此れ
うなづかねば物よヒミをなす。よどみやうがくらび。故
御事ああす。古今うづきも五事よもぐれといひ。もくまひ。耳もくた

ふくらむて國をめぐるのや むのまゝあつ。故よ古はすあはれのきづるをと
なまくべし。まづちづきを捨てしまへよト。人をなづバ。小見と云
はく。古くはまづり。承宣女郎とある。

防風
此中古ノ流布有矣。旧本又云某某。

わきまへし。むきよの仕事の名をうつからむももそと、ソルハテキ
セシム。國とソレ税と多くもあくらへおれア。アラリセシム
女郎ハ歌仙傳。式部卿重明親王女。天暦え年入内。
古今の代表典侍直子ハ作者歌峯よ。五条后姫といつア。ま
うまばくにえ代歌ふと。此山みれすとも。直子のすれ代
據よ。なまくひとかずく

五條后冬嗣公女
順子仁明后
或云長良卿女明
子文德后

をせびとやまくと故戸部主か乃門守・勅撰ハ道乃主事。
秀吉を可被撰事ナリ。もひよあるよもねきのよすがこわて
人絶もまくねきをあらう。まつぶアマムシモナム ほづやさやさ
きそ。うづみうづて。予は射面の時作^レ。ハラハラは國の
風俗なり。國よすかくのものまくらう。まくらん就古^レしてせ
うきくきくてもあ。独^レそそぐをきくきのもあ。トミキミの
ひてくまゆ。あよ^レくわくぬものと。トミケ出^レて。あくとさまよ
も入^レる。ば振のへつよ^レおなう。勅撰を承て。もくくドミ^レ
もくともくとんす。名譽をなき人モ。つまうまくもとう御^レもち
きくんなどうおふかくごくもくとやくふ。とくと西のまえ
けうさく。やくとまくとまく。勅撰考のくろあく
人のいひちくまくのり。おもとあらぐのまくはすおぢと
をきかを手引とくあらぐ。幼子のくじまくじとく

かうりくらあすと、えゆくもそむかうをわきまつるの
むな車とつゆ。先まほのまめ車ひくとい
ア空車のまよゆ。頼政ふ。五車立

のせりやふふらきくさくわくとれりもすまちむちくまくられ
是や車とすゆ。今按よもな車とあそをよろて、
トナリ。うつはねに。ぬ原天のをよる。むれ車よ。と。おほ。つみて
きしてよろとく。は文義を車よあひ。精吟に作中也よ。むす
車引つきてあやしくあく。おぐくして。いとをく。をかく。よ
あくとくとく。をく。車とすゆ。又言ひた。計三十
女よりよや。ば石とく。てんとく。いひ
くふ。も身よき。まく。まく。トノ。とく。もな車かく。よやく。て。てく
ともれ。按よ車とのくわく。車蓋などあそといひて。むな

車と、大臣取をなして、とうりのあと、とあいく車を、ひとと
ぞく。今れき御代えれ車の事なく。わざすよ。にさすは
をわがのつとあ。こまよやうだる紀車。まわひきく。をと
異をよ。力れあうまよ。車など。ものよ。あくと。ちば
もとまく。漢よ。所謂棧車。又万葉よ。高まば力車。よ。七車
とく。ばらつ。車とは。れな。

○千載集上

忠度

皮や。まのわ。れ。い。わ。く。を。考。た。う。の。こ。く。く。う。な

今。按。よ。久。安。ふ。こ。斗。大。ま。つ。督。お。う。合。散。位。隆。長。清輔本名

け。彼。や。き。あ。の。教。あ。れ。よ。と。ま。ま。も。の。ハ。教。づ。む。月

拾遺集

忠度

あ。い。う。れ。と。構。の。ま。そ。を。か。の。苦。だ。う。れ。ま。ま。う。く。れ

忠。度。け。う。く。は。う。う。成。く。て。よ。う。か。り。よ。而。左。久。あ。る。年。う。合。

上ノ七

判者右京ち吏頭。補卿。判云。かく。皮や。あ。ゆ。つ。の。ま。を。未。ま
人。九。多。萬。多。人。九。多。萬。多。ま。ま。う。く。れ。と。構。の。ま。そ。を。か。の。苦。だ。う。れ。ま。ま。う。く。れ
古。年。よ。う。う。成。く。て。よ。う。か。り。よ。而。左。久。あ。る。年。う。合。

は。や。ち。あ。ぐ。の。教。と。よ。め。ん。す。ハ。い。ま。ご。う。く。や。ま。だ。モ。経。修。る
ま。く。く。く。そ。う。こ。う。ハ。ま。ま。う。て。や。と。う。く。判。の。う。

け。う。は。や。た。ほ。の。あ。ハ。く。う。も。き。か。く。乃。ま。と。ハ。い。つ。こ。な。く。ん
と。あ。う。あ。う。れ。き。あ。く。い。つ。く。よ。う。と。よ。し。か。う。け。例。も。な。く。得。や。く。説
立。て。の。う。す。千。載。ま。よ。入。ト。う。後。り。を。傳。つ。て。ま。き。の。教。と。ハ。あ。は
く。よ。じ。う。や。あ。く。い。つ。く。よ。う。と。よ。き。と。よ
き。う。ハ。是。不。ト。う。と。教。と。金。流。せ。大。は。よ。教。一。終。か。大。は。乃
樂。都。恭。仁。な。ま。れ。久。の。教。と。う。す。ぶ。一。山。株。久。述。都。モ。相。
相。樂。の。教。と。う。い。そ。め。づ。と。

清語抄。近江国志

おもは波つゝあ。おののたゞはとくよもつまよは
やさかのとひは。あさやうはとくよもつまよは
あくあまて。欽明紀三十一年秋七月
狹い波山ヒキコリテ船ボウ
さりあらば。ひにとづくが。さくはくわざる。て。湖クルマツ
ハ淡海ヒタツマツと。はだ海ヒタツマツのくわゆぬんうてきつよ
神功后紀云。軍衆ヒラフ及于狹い波栗林ヒラス而ヒテ天
武紀云。諸將軍等悉會條波ヒタツマツ而ヒテ古事記仲哀追迫敗
沙シ那美ヒタツマツホスミグヒタツマツ江カワとづくづく。さはといア。さは波
のとてとてをし。まめ。とくの國ヒタツマツの名ヒタツマツふ。とくとてつけく。
つまよもつまよも。ちはの國ヒタツマツの名ヒタツマツふ。とくとてつけく。
あくあくや。但ヒタツマツはやをひとつけ。おまきと東北人丸ヒタツマツは
あくのまよも。のこして。そひ夫ヒタツマツおまきとあく

おおきに傳聞もあらず。又の事第一人丸。
皆あれ國のまほ乃太はれ。まよ上下畧ありの國れ。けの太はとづる
る。塙川後をそむく房つ

はやくまほ乃あらまほはかどるやかのひの
まへはのきよりて今構ひゆうてかくわ形たまもん
う能者五角てがくまれそえあらんたう・あゝ断一が

瀬按ナキナタ畠本和名抄長力ノ
条ナニ或說云別鈎奈岐奈太
出所未詳ト
アリ此作者ハ畠本和名ラ見ガリレ
ナラシ

をかくそめれかとまくやくさきと、いつふか、常盤の尼うなぎの
鶴たぐい。しもくしといつ。今れまさん。又お氏このがく(題
目。井蛙抄)
へれいぬきこうもひー雀せゑのうちあつらうやくとん
れらむとよなうき。あかくほすれ和名釗よ長刀ナガタチ、あきや
難刀ナタ、かく。難刀ナタ、よる家ゆづるよ。はきき嚴かくかかとう。靈多
を蒙て。難刀ナタを経て。そぞろ

○ 和名鈔_ニ四聲字苑_ニ云 鍛_{ニヤ}治_一打_一金_一鐵_ヲ為_レ器也_。俗_ニ云 鍛_{ニヤ}治_一詫_也云_ニ是_ハ下_トもの治と治とちうづ詫也といふもて_。鍛_{ニヤ}治_一を
力子_トりよが治_ニ、あさぎ_ト、力子_ハ鍛_{ニヤ}治_一の和名也_。古事記
應神_云又貢_{ミツキタニル}上_一人韓_{カナ}鍛_{カヂ}名卓素_云舊事記五弟_ト鍛_{カヂ}治_一師_一
連_ニ又うちかわや_トみ_トのまくよ_トもろ_トねのく_トひれから_ト二十
人_トかくといつ_トうく_トかわや_ト限_トのけ_トとあは_トおよき_トまく
○ 和名鈔_ニ癲狂_一俗云毛乃久流比_。癲音天狂訓太布流云_ニ今按_ニば癲狂_ニト_ト

クツチと訓せられ。太秦牛祭祭文よ癲狂絆クツチと占ひ。は祭
文ハ傳教大師作とも。もとい、尤古訓ナリ。おらく曰わくよ
おまかせど々々。ぬあ。うりよくとひまくとくとく。四つほよも
くねうう。くつちよせうとも。是も癲狂れ多くて人事が多
ゆき。あせうまうとけすがく。がる無うとも癲狂をクツチと
いフ

○ 鰹をカツラと訓む事。貝氏云かくをなす。干てかくさむ
なり。夕とツと西之。東雅云。カツラトハ堅魚なり。其肉を腊と
なまし絞つて。おもてあひ是が鰹を脯と。まちの訓
義より。古魚をカツラと。へ訓。あくまどや。わん。今。按。年
中行事。秘抄内膳司供忌火。御飯事條下。云。景行天皇五十三年八月。行幸
伊勢轉入東國。冬十月。到上總安房浮島宮。尔時磐
鹿ムツカリ雁トモ命從駕仕奉。○六雁命以角弭弓釣遊魚。忽

獲數隻。仍號頑魚。此今諺曰堅魚。畧文也。或曰鰐也。
始曰頑魚。といひ。を。頑也。タクの反ウカミバ。十を略してカツラ
といひ。一。モモヅキ。鰐を約す。今も飼餌を用ひ。そにて
以牛角或鯨牙。一瞬。釣數百。といひ。

○塙川院百首。後頑魚也。

うきよのあはづ。身にまとうと。年を越すな
おり。うきよ。事といふ。なく。思ふ。トハ。十二月。世日の夜。裏
笠を着て。本のまゝのゆ。我が。と。まき。あんま。年の一。を
のゆ。あくま。事。はるえゆ。だい。さき。梢。な。う。と。哉と
よめ。う。そ。ば。はるえ。う。そ。う。ま。と。事。と。つ。と。う。と。といひ。的。後
な。そ。行。用。か。そ。そ。あ。よ。万葉集。卷十三。

志貴島倭國者事靈之所佐國叙真福在與具

契仲云。是事靈とハナアレ。言靈の事也。第云。言

加茂保臺灣序。万代。日の子。は。ほ。と。か。う。と。く。

御製

いとひにふく。たま。な。ハ。百。せ。れ。ほ。も。つ。き。ね。力。強。そ。う。を
言靈の。と。も。う。そ。ま。く。へ。今。是。事。の。事。據。て。ま。ふ。う。よ。唇。を
む。一人。樹。の。ゆ。ア。ハ。斧。を。推。く。お。れ。き。や。ま。の。ご。こ。も。本
よ。あ。じ。て。本。年。よ。く。實。サ。ル。や。う。な。と。ど。と。つ。時。樹。の。人。生。リ
よ。し。や。う。と。答。か。而。未。を。よ。く。實。生。と。い。ア。是。是。靈。の。真
福。あ。と。な。い。さ。き。ハ。い。ア。ヘ。よ。も。う。あ。う。の。事。と。民。間。よ。あ。う。と。お
べ。ま。て。指。な。う。よ。年。を。説。う。れ。と。よ。あ。ま。つ。年。と。よ。あ。ま。つ。年。

夫木集

收惠
より
おまえ

拜

拜ヲとアマツ。彼豈能シカニなム。古事記。伊勢六
御神宮ヲ拜ミス神朝ニカトヲ廷トあり。嘗アタハとアマツ事。古くより残リ知ル。と。
故ハあま。院アマツノ百官ヒサツおハづかハたムなレ。ひツのハはムん。はハれハやム。そ
の事ハとアマツいテ。よリのヨリアマツハ、よリアマツハ。すカとアマツ。
きハもアマツのアマツもアマツ。古俗アマツのアマツ也アマツ。

○は捺ま難
育なまくもあらわすれ、
吉原といひをなへてもかくもあらわすれ、
たゞかなむよ。

ハ往來あれば云。かたはま年のかくさせとくらをかくひア。かこ世
のキヨヌいうて蓼原タニミあくらんとがう。かたはまハキムアヒテ
かき事。城蓼も辛カツまくで後アフカウミ。是ハ何と新キモキムよ
う。すむきも画アシカシム。かどりカドリカタナミキ年といふすあらびアラビ。
蓼タニ、ことのちん事トコト。和名カツラも蓼タニ_{多天}とおもひて。
タニミトハつと。河海カマより引アキひ。此シキ物十列ヨモ。蓼水タニミズを

タミトハトアレタモアシツハ蓼實齋ミアの事と申せば之
あくテ冷よざきぬようす。がく称あんようなまよあひび。ス
代ま不審稱名院殿よ。いうよあくまどか。ふかさすより也。其もととな
タゞニハ考れけ。用ふタゞミけな。と。其も未詳。と。其の事
なまく。と。其の事の名も考る。

今案よき日ひをさうトリよとちハ傳寫れ得るをもぐし。は
す回をまう仙事多々ハ忠岑をまく入て、トモジテ、もくのながり
もくわくめう。まくんハかんなりよよトセ。ハ・ト得る。あやま
トトもく。けすれハウソ後モチ、ジヒムシモモモリテハ・年
もくもくもむくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
あくとけくくれひとくくく。まくもくハ和名抄云小、巖
之太タツ
タ美タミ
所ツクシ聞多スミ祢乃タメノ机之島能シマノ小螺平シラヒラヒラヒ伊拾イハ持モナカ來テ而イレ石

續接肖ハアノ假字ニテヤカルモタラ
カレイフ書皆エノキノ鑑ハアヘイカ
入江氏ハ假字ノ學ニハ妻カヌト見エテ
此書中往々假字ノタクヘトヨリキコ
奇ノイカテアタルハ称名院殿ノ説ノ如
鑑ニ堪ヲミタリ高寄ニ多ク堪
意ニアヘトイリ高寄ニ多ク堪

以都追伎破夫利早川尔洗濯辛塩尔古胡登
鬚毛美高杯尔盛机尔立而母尔奉都也畧は小螺
をかく塔よきといつとをなまびいと小螺ハ必有之子
をこそ食セリと召す。一首の詩ハ塔といハなくともか
らこそそのやと、安の辛勞哉そくそりよから。いよあへるね
とハいよあやかくまほとつわたり。古事記よ前とさう。羽恒
まほよひまくまあぬ人をまほつやあくねんとまほはの立て家
ハたまくめくは前よ。前とあやうてかくのうとせまほ
まほに。前とてなまくよ。前とあやうてかくのうとせまほ
かづんがゆく。自らの名をまほづみうけく。寒士のおまひを
のへーな)

○中勢をもく

反山の三月ノ経日て御座ひうそもひとくわん

赤冲師いそく。山もれハ鞠野うそ山野よ鞠園あう。うそやう。う

そ四本中務を考すよ

○ふくのまきとわきて。山野ハいうて。うそとくとく。うん
うあ。けちの邊りうそ。第一に勾下との二上りうそ。あうも
一文字の短く。きよ乃やうよなまう。ともれくとよやまき。其のま
まき。納思よといもれくなら。四年のくとくとくのひく
よがんで。いふままで。うそとくとく。うそとく

○同集よ

神のみかけれかうそとくとく。神のみまきをあそぶ。やまと
日本人いそく。山もれハ鞠野うそ山野よ鞠園あう。うそやう。う
うあ。あらかじめ。水とくとく。うそ。残りあれ。よとく。の水とく
耳かくす。うそとくとく。うそとくとく。うそとくとく。うそとく
うそとくとく。うそとくとく。うそとくとく。うそとくとく。

やまとよしをす。かとひ日大にそとて望ましもかどもす。
三代、実源うえ。鴨川と甲川と鴨水とせいかれども、み月川とよ
えども鶴の跡れまくても、跡をきふらはさむのとくとも
つまぬえく。是又四年、御まみけ考へてよ。上句は少くかずれ
がよくまち御はとまきて、やまとくもえくすかう。流布印
を御めと得るよ。御まみけかくすくむづくくなう
えくまみてきのとくよくハ解せまみをう。まち御とうらか
まみくとせきのとくをあくわくやまくよあくらとむづく。
あれ、順ゆくもゆくとくのとくも。ひあくびくいじたもく
ひいちあく

○あやめ草第十上
あよかとい妻よ女を衣ふと
あよかとう。又伊勢をあよ。翁も
と翁のわきのうかあつて。植え衣ふとひむ
と植え衣ふとひむ

○風のすよりとひるをへ候ともウヌノミツタシヨモ
坐至弟ぬよ・西と使トリム・家ノヘ・使在之・春雨乃レ又
夫木集セニ・アツアツ人ノモトトカ・わからざ
あづちもと甫ハシモクル見テスラモ彼のけふヒユ 平祐舉

是ハ世の使トシ

はくます。それもあゆけとひいへんと
あ、かくはうれくとも、あくまでも、
やうひまやがのうひあくらむをゆのうアハルよほきしハ

○肩をうつすとくづ。ほひゆれなまくらく。しほお。底
ひぢかよ。蝙蝠をみて。肩をひく。ゆくまなむとのいひく。

二本骨少ヒラキ尋常ノ骨有ヤ骨
サシ女房ノ扇トイハ是ナリ
又のちく櫛扇山吹扇さうも紙と云々す
色よりくくわ紫番
てふ等て或ハ漆絵
或ハ彩色也。表の只
徳の紙を用骨ハ厚
朴を用或ハ竹を用
墨漆朱漆等の絵
を凶喪け扇の事を
用骨數旧記よ戴る
而大骨九骨十骨ホ
也と云々

おなづと訓す。そぞろ多内義俊云。御堂園向。短
尺中、文の多きを成。一々考へせば、とほくゆう
ロ記す。尺中考。短尺中丈と。叙位條。内の時。友位を
事と。紙を細く。もとち付く。とく

寛平菊合序云
今九がひ秋分を以て
りてぞあらせすとよの
さよゆきすとよの
ふの名をほけよ葉
ハ短冊をあひ付す

今俗切手ト云類歟さうへども短冊をすり代さうと司ひ
右安源氏倫義と問題を短冊よさう。既
よろこき。短冊寸法普通の段幅一寸ハ少長一ニハ二寸
なくと。度憲深後お云。短冊のす。る世を折河ト令ひ
長サ一尺八寸。今入見年。ば頸岸柳ある。自年より
裏書ハ折河す。子細ハ度考年。はれ。短冊おと相應
まし。かげども。やドク。セサ一尺一寸。幅ニすと。畧文あま
い。て。シテ。

○多雨。義俊。懷。兵。ハ。清。和。帝。の。は。す。紙。と。つ。わ。よ。ま。ち。の
く紙。を。用。ら。く。と。乍。往。の。記。よ。く。す。く。乍。往。の。近。奔。あ
は。の。人。も。そ。ほ。和。帝。ト。う。ほ。れ。人。し。ド。ば。つ。て。か。セ。移。す。れ。く
○雨乞。小町。ハ。そ。の。川。と。の。い。ぐ。ち。あ。け。く。も。く。と。り。い。能。因。毛。
筋。代。か。よ。さ。さ。く。そ。と。う。そ。共。よ。そ。人の。ほ。よ。あ。と。れ。な。今。拂

又第十八。天平感寶元年閏五月六日以来。

起小旱。百姓田畠稍有凋色也。

もめろきの。も。も。も。も。國。よ。あ。そ。け。う。、萬。調。す。き。つ。も
と。ば。く。き。と。ね。そ。の。な。う。そ。ひ。雨。す。く。日。れ。そ。か。き。う。ご。
うち。う。四。む。ま。き。く。け。よ。す。と。朝。ざ。て。ま。ば。ミ。か。き。の。そ。と
そ。よ。ひ。ひ。り。の。ふ。れ。と。う。よ。そ。の。人。ゆ。あ。り。け。白。や。わ。く。
そ。の。お。こ。と。あ。べ。す。ち。わ。く。と。れ。ぐ。き。あ。り。て。雨。と。た。ま。よ

反歌

そ。の。ん。ゆ。ふ。や。ほ。ひ。く。と。そ。の。く。も。う。雨。か。ふ。め。つ。白。や。わ。く。
ハビリテ
心タルホトヒ

右二首天平感寶元年六月一日 大伴宿祢
家持作之同四日雨

賀雨落歌一首

欲言興亡
事の如き
はてあけやまく
かくわくとれ
雨の如き

三
言

まよよわもくねば民の欲なしハ大もとあえやくまく
後醍醐天皇

後漢書

是心を以て止雨の事能ひ

○船内にて近春十日ハ月十三日み大風の如き、
佛子はまことに御心地悪く、よろしくお

法華八講。佛法僧鳥來鳴。但錯亂闕。大難取決云。

講化法僧龜來唯同十八年八月十三日癸丑大
臣忠平於乙條家限五日十座講說法華經
大法

僧鳥來鳴樹上。今文人詠詩之是なり。躬身集（めぐみしゆ）

まくらをひいての深し
さきの處で、おまめの運行の、あたふ、風立ちて、日暮れ
よまく、あらぐみの海に、アキメの國あれあんま

今案仲哀紀云二年夏六月辛巳朔庚寅天皇泊
于豐浦津且皇后從角鹿發而行之到亭田門食
於船上時海鯽魚多聚船傍皇后以酒澆鯽魚鯽
魚即醉而浮之時海人多獲其魚而讃曰聖王所
賞之魚焉故其處之魚至于是六月常傾浮如醉
其是之緣也云新撰今帖又知也

少子のやうなうすにあらうとて、御父今もあらう。
是處まのが事とよあれど、此處方々のうくて魚とあ
る。銅とて、様銅とて、う付て、うとく物いよ、トナリ、
あらうれあひ、仲哀紙よとく考へて、亭内つゝ和名抄、安
藝國・沼田郡・沼田安直安知加アチタ
カノイタニ額とて、あらうとて、うとくとあんとぞい、ハ。

安芸人賴氏より。安芸州豊田郡味方村地
ト云備後の國界よ近く。藝の東也。鯛の浮来。今ハ三月
三日。その夜。なまはげ擣網。よそもよそもよ
海に。入る。なまはげ。なまはげ。紅なり。肉も亦甘めなり。
但一。日未紀よし。内といつよ。ハサキ。あま。ニシテ。方の春
され。とより。よひ。よく。叶ふ。なまはげ。いつともあらう。
のぬ。あむ。なまはげ。事。かくし。

○ あくまでさすがに、おれはよきもよしも思ひとつたの
ところにてよみがえて、一よきくわづかに但きく、ちくとあらま、せ
うか。えんかくともうて、一もじぢて、まづくわづかに、せ
きまわせぬむちくすかよきをよめ、あかくもくき、
かのう、まのまよい、一もまよつて、いざのよとよとた。
一、うなづく、まう、ねじらひ、あくまく、おこづかく、

くあまよ、まゆくとす。もひはきげくなりまほ葉葉等ハ、夏
山え、木ホ^{コスエ}、乃繁ルトキ。神中、おニ、あきのわがみのう
わ^ハなと、いつれ三のほほよ。旅宿、まゆお、なと、けく
おなむすりとあらうとまく、そくとハ^ハ芳ナリ。併

和名鈔 狗尾草
詩 齊風 甫田
正又ノコクサ

和名鈔狗尾草
卫又ノコクサ

詩齊風甫一

宇鏡
佐久
姿波

章無田甫田維秀驕云又孟子盡心章西秀恐
其亂苗也。とあり。板をおくほどのつまぬやなうんふ
ゆくもくさうてあれそく年せいづ。むせ草叢生そくめふ
きく敏秀とつづく。つづくも秀とまし閣訓一す。
ちくとめくされ。おひきくよふくわくとつくる。
経やとくかく。おのとくの名さくよけつゝ。まひ小行
くじゆくくふ。おくま、とへづるよまうん。但はまの
そくと代えさうハ後半つのす姫出所さうと被ふすゆをあ
らまく。やうされ。おゆ冲あた。後成つはまはくという
なまくゆきまゆをれう。おゆくゆくとひちかう。後
くのすう。小行とくじよどよわくとえゆうとあ
れ

○ 河、社云々もあがりては、むかうにまつたまつて、うけもじ
やもじ。また、むかうにまつて、うけもじ。まつて、うけもじ。
まつて、うけもじ。まつて、うけもじ。まつて、うけもじ。
まつて、うけもじ。まつて、うけもじ。まつて、うけもじ。
まつて、うけもじ。まつて、うけもじ。まつて、うけもじ。

うへのむらくはなふとくす。さあねうひなむを
是れもまいもくはなはるの一色也。

皇之建内宿祢大臣白心我天皇猶阿彌婆勢其大御
琴自阿至勢云古事記のまへたる事アリ

濱按六日の菖蒲、當時ノ詩
新宿六帖あやめくき 衣笠
いりよせん今ハ六日のあやめくき川
人ナキヨウガルノ

○俗谚云けんくもくの棒ちぢみよしとまちい
うとくやすもかわ風を十一三。四國と九高利古せぬ底をぬ
今ハ行の角をあまくま。ひりれとあらゆるまきわむ。翻毛のち
きむねうかとわ。まくまく
○人を切るをくわあらわとよ。ば切れあらわとよ

先に松葉をとば枚す却て
の後まことにそぞろに、はひかれてるかと
笑ふホニ。日れやもんをうそゆめ
といふくづびをわゆよがおひのくいじりとひづほ

氏須磨也よ力めのゆきまくは
○但浦よ舌れまくわと舌うむぬとえいもあ不
自由なうれし物語うむ白ねとつて吉領たる大吉よ、は
ちとつてとくとく白くといつて、一ノ屋二もちう、伊波比モトホリ巡回イハ
這シテ又第四射往モトホリ巡回イハ發ハタハタ
之シテ又第四射往モトホリ巡回イハ發ハタハタ

○ ほよきとんあてとなくれど三のむづかへりとよ
ち古れたらく行れぬよ。まちもくらみゆきよんかへ
がなれどもとく。又大おおきはるのむづんかへりくとよぐの
國へつまく。

○物を身につけ候をスベルとアモ仕事多シ特急か
竹をあくまくよだのヤハラギシニヤモジテヨモシ
○ぬき身事をやを仔耳ドリカムトコロモシモシ
物を身につけ候をスベルとアモ仕事多シ特急か

ちゆかやふくさはくとおもて。再びかくまくだけうね

○まくらのまよまよとまくらのまよまよ
ハナツウヒテアモシタク、わに
マリエケのまよまよ、わにわにまくらのまよまよ
ハニマ

まく、いは、染、手、て、く、と、れ、う、そ、一、こ、く、を、ま、く、る、べ、し、た、だ、大、え、ま、

○ ほ語りおそれしきよづくとておもひ。せせ
はれよつたまをつゝあふふふふふふふふふ
とくさくうかんこくあはばおづくせせ

○がもくと云ひ修まらざりちをもつて。將辭すと。よしと
さうわまくかんじらかよ。そぞくを按よ。ガチハ多^{カチ}な
木類云。周易說卦曰。其於木也為堅。多^{カチ}心。
師說多心讀み
多^{カチ}心是^ミ知^シく
多^{カチ}心是^ミ知^シく

○俗多言なまくはきの丁度よし。今後なまくもれますまい。
物をあわせにまく。おまかはるまことのうへく。
そぞ事を批判。また穿鑿する。もとめ。ちくはく。
同様。やづらう。まことの事。をもとめ。わざわざあ

事めやうよ。ふく人よもがく。まくはるにくと
○ぬるえり。まくはるにくとくすて。秋風かく。むそ
すよ。后、まのく。

子よ居るまゝ
まかづけ、おひつとも
もやさぬのまゝ
も離^{ハシ}連^シれて離^{ハシ}連^シれ

○ 磯黒なまの御^おとすすむに
位んとくはす。とおゆきをそゆう。彼^{かれ}もきのひ
くらまをくろす。似^おふきをくろす。彼衣^{かれ}よさはまのひ
よ、おきく。きのあたまのくまく。ちかくみゆく

今後せびる事無し。其の事。因縁

轉へ得てセタケルとハツカシナリ。独處す。おおざまは
かづきノリ。まもせあらひはよどむ。主名おまえ。多田が名
きく即ちの姓也。罪の軽き事より多く。うちてあらへセ
リ。又後半生をよみ上る。あつゝよもよ。うそ
きりきり。かたづけあらへな。されど。セトハ龍
主也。アキト、撓たる。撓直の言ひなづく。

聖月イ
うんづらひの九月のまよづくはあつむがとつてのつを
で上中下やまめくとまよひやすみへほまひや
むやくとくえ・麻疹なまくすゆ・うし今のはまくと
く 按よ万寿二年
さか年事に布引事もあ月もうとわもひこがくと
事つてさてせの人やむたどまゆ・うち力行よなうてひ
ううやまくとくわのくもれくとくわのくもれくとく
きとてたまわうまくれくおやまとわくと・ひくじよやうと
きくとおまくとあくとくわくあくとくわくあくとく
うとがくとくわくあくとくわくあくとくわくあくとく
ーをくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
うくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
原九年庚辰流行の事
らもく

○ 鮑 倉 ハ 面 倉 の 客 れ 又 壊 倉 れ 壊 を 己 心 て 今 ハ 鮑 倉 ト 音
よのこゝゞゝや 契沖説

○寸白之子之丙。致丙

○寸白とよふ病。醫あよ、病はを考すまハ并氣もれとも。伍
よハ陰囊れもくせいじて。男子のこ病。すとそど。女も病也。
葉うらよりうるを放すものをえ。中空わき内へなづれ。ばゆ
き。さりくもい。あくまふ。よの今ハくもく。うるせきをひよー
き。まほ。おうううう。きるなかと。きくび
き。まくもくは。うりうり。い。うきと。かひあくまく。よひと。ひ
は。よく。や。まき。て。く。せ。まき。く。まき。く。く。く。く
かく。うき。わ。す。そ。く。よ。お。う。う。まき。まき。まき。まき。ま
ち。も。ほ。う。う。え。又。日。キ。今。苦。わ。第。サ。ニ。今。昔。腹
中。ニ。寸。白。持。タル。女。有。ケ。リ。と。も。い。アタマ
○俗よがらの風きくを。ゲモス。此語別ニ載ス

○俗よからぬ書く人をげほす天窓とつま外法天窓也

五代帝王談云。永
久五年八月大相
國公相薨。勞僅
兩日立。

さうからをか法を行ふよ用事とアリ。されば外清とよ
なうべし。塔後弟ハ西園寺公相れおとくをせぬ。不^シ
云。はうむれ在。棺入終了内からを。人のゆきみとくも
とくめづるをもむか教の下モシテ。ううて申はざる内月のお
ちやうじふがほとくやまつよ。がくたけりかく。乃入
奉うて。ほ。う。め。アリ。あらのき。や。う。か。人の
ぞうて。う。ま。是の事。成付。得。が。く。ち。あ。す。成名付て
げほくといひ。せ。う。ま。う。か。う。て。ハ。袖。孤。毒。う。の。名。乃
や。う。ま。い。一書云。西域記曰。屈支國其俗生子。以
木。押。頭。欲。其。匱。匱。^{ライカコラ}云。屈支國の義を以て。和方既と云。さ
按。玉篇。匱。匱。薄也。とあり。もうまハ。御。手。事。と。う。よ。べ。これど
ぞ。まよ。い。く

○巫。よ。な。き。人。れ。事。を。と。か。と。今。俗。口。よ。そ。と。う。す。い。す。ト。う。

あうり。ア。学。た。後。ほ。悔。の。ん。の。ま。よ。大。幼。す。と。の。う。な。く
う。う。行。あ。み。ち。又。か。こ。め。ま。と。そ。く。う。ま。く。あ。ん。と。と。た。む
の。乳。母。な。く。く。ち。く。も。ド。モ。う。ま。く。う。ま。く。
○俚。語。女。の。化。粧。ア。レ。カ。テ。リ。ル。ム。を。み。く。と。と。と。と。
書。つ。ミ。ス。人の。そ。よ。く。う。め。テ。キ。ナ。と。ん。の。ど。う。よ。あ。ク。の。け。さ
み。く。と。と。と。

○俗。よ。按。度。と。と。と。股。を。摩。拭。と。と。と。と。と。と。
連。奇。師。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ち。ま。世。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

なまくらの花とよもぎてうるゝくえきは原とよもぎあら
えちほりれふめとうくく後の大根れいとよもぎよもぎ
うらへしやまもとて、尺もすもよもぎうめうてく
よもぎとよもぎわだつー

○樽ハ源順云辨色立成云音與尊同○今案無和
名ニキミハタルの和名ハ俗ニ出でぬ。通素よりもの
がく國篠^{ムラサキ}モ^{ムラサキ}入^スセ^ス。又^シ入^ステ^スよひ入^スセ^ス。又^シ入^ステ^スよひ入^スセ^ス入
てももとづくし樽の音略^{ナリ}。のよち時たまトハ^{ナリ}さざ
らも

○俗ニ物賣^ル店とす^ル和名^{ナシ}。店都念及俗云東西
町是也坐賣^ル物舍也とのとありてタナと云和名ハ^スて
モ今其^{アリ}の物賣^ル事^ニ未^シ申^ス。も^ハ申^ス。魚^シ。
とてき^{アリ}あつかり^スとよみとありて^スだま^スとよみとよみとよみ

ちくだりとつる事^ニよ

○俗ノ人ノのとくちくどりをきく^スと付て^スと云。又云
なまくらの花とよもぎてうるゝくえきは原とよもぎあら
えちほりれふめとうくく後の大根れいとよもぎよもぎ
うらへしやまもとて、尺もすもよもぎうめうてく
よもぎとよもぎわだつー

泊酒舍藏

